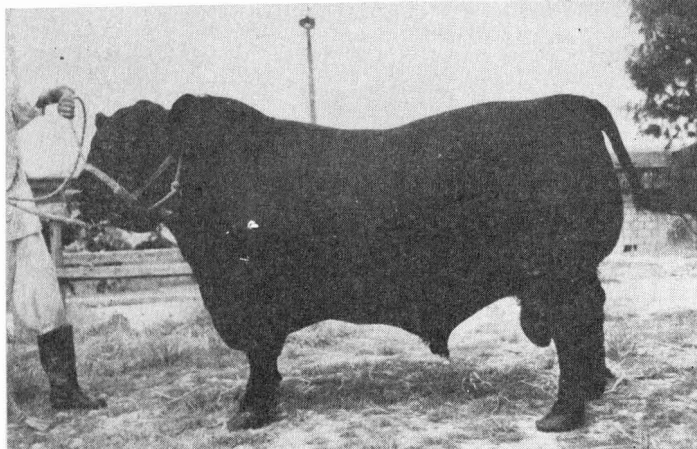


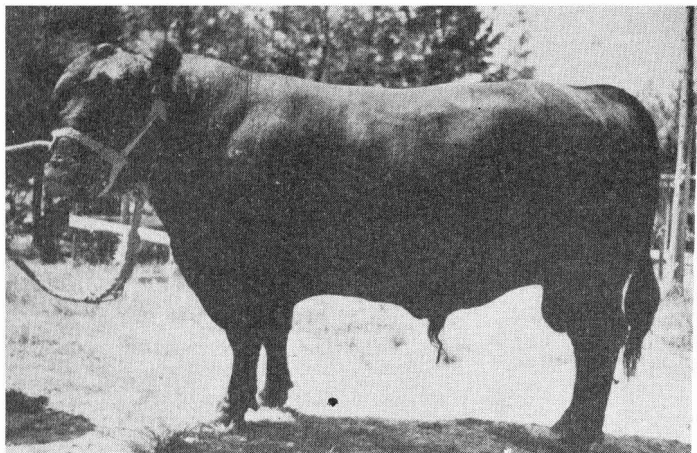
# 琉球大学学術リポジトリ

## 肉牛の王者アバーディーンアンガス沖縄に入る

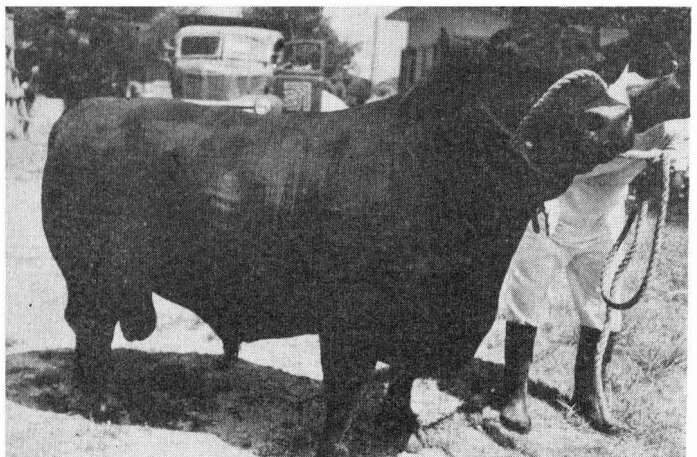
メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古謝, 瑞幸, Koja, Zuiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20437">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20437</a>



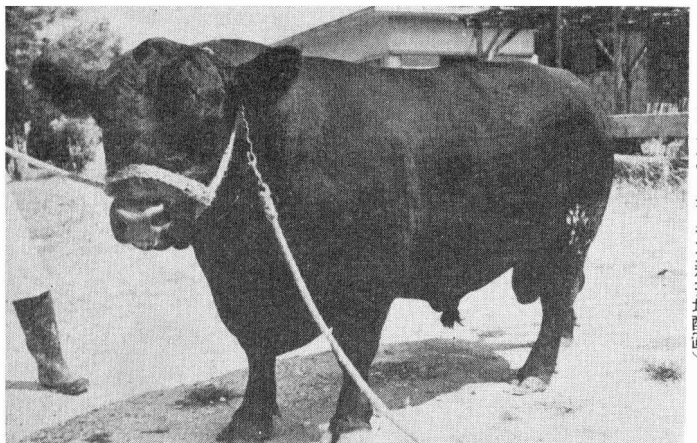
一九五九年一月三日生 (八重山種畜場配置)



一九六〇年一月二十三日生 (宮古種畜場配置)



一九五九年十月十日生 (琉球種畜場本場配置)



一九五九年五月三日生 (羽地種畜場配置)

## 肉牛の王者 アーバーディーン アンガス 沖縄に入る

「ツノのないクロウシ」が去った7月6日の朝、那覇の港に元気よく上陸しました。左の写真の4頭がそれで、肉牛として有名なアーバーディーン アンガス種です。

アメリカの南部ミシシッピ州に牧場をもつキングメリットという篤志家が、沖縄の肉牛改良のための種牛として贈られたものであります。これはたまたま商用で来島した同氏が、民政府の畜産顧問キューン大佐にお会いした時、同大佐の沖縄の畜産振興に対する努力への感激と沖縄を思う心があい重なって寄贈の運びとなったといわれています。沖縄の畜産史に新しいページをきざんだ御両人の功績に深く敬意を表したいものです。

メリット氏はミシシッピに大きな牧場を経営し、自分の牧場で繁殖した多くの優秀な同種をもっておられるそうですが、特に牧場経営に深い興味をもち、今までにも米国内で多くの種牛を各方面に寄贈し、又は安価で提供するなど、その慈善行為は高く評価されているとの事。

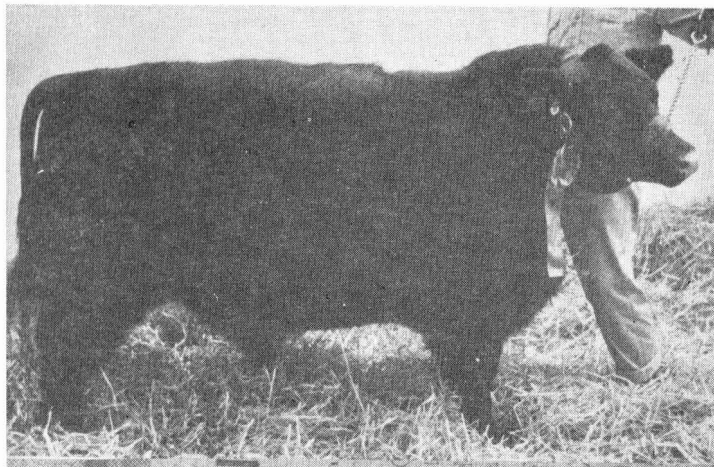
アーバーディーン アンガスはイギリスのスコットランドの北部、北海に面した地方でできた品種であります。

そこに、アーバーディーン、バンフ、キンカーダイン、及びアンガスの4群がありますが、いずれも幾分高い山岳を有し、温和な気候と降雨に恵まれています。こうした牛の生産に理想的な気温と豊富な青草の自然環境が、今日みられる幾つかの純粋種の育成や、改良に大きな貢献をもたらしたといわれています。なかでも、アンガス郡にあるストレイスマアという流域が アーバーディーン アンガスの出生地として有名であります。

「家畜の近代的品種」という洋書によりますと、アーバーディーン アンガスが最初にアメリカに導入されたのは1859か60年ですが、その時も、この度メリット氏が沖縄になしたように、ロード、サウスエスクという人がジョージ シンプソンという人に寄贈したと言われていいます。しかし、その家畜がどうなったかは明らかではありません。

(10ページにつづく)

※ 本場配置のものは1956、57、58、59年度の世界最優秀種畜賞をもらった牛の異母兄弟です。



いません。その後、1873年カンサス州のジョージ・グラントという人が4頭の種牛をスコットランドから導入し、テキサス ロングホーン種と交配しました。その結果は上々で注目を浴びました。こうして数年もするとその人気はまたたく中に市場や畜産業者の間に広まっていきました。これがアメリカにおける本種の始まりであります。それから10年後の1883年、初めてアーバーディーン アンガス繁殖者協会が設立され、同種の登録制度がしかれました。最近の数字は明らかでないが、1948年1月1日現在の統計は1,055,000頭以上の登録牛を記録しています。

筆者は1959年、ミシガン州立大学で催される例年の全ミシガン州肉牛品評会を見学しましたが、同種の飼育熱はヘレホード種に劣らず盛んでありました。その時の審査員の言葉を聞いて特筆すべき事は、「前年に引続いて今年もアーバーディーン アンガスがヘレホードをしいのでグランド チャンピオン（最優秀賞）の栄冠をかちえた」ということでありました。

このような優良種が初めて沖縄に導入され、和牛に交配して肉牛の改良を図るわけですが、沖縄の畜産業に新風を吹込んでくれるものと期待しています。

（古 謝 瑞 幸）

写真は米国におけるアーバーディーン アンガスの飼育熱を物語るものです。上は一九五九年ミシガン州立大学主催による肉牛品評会の審査風景で、下はその最優秀賞を射止めた同種。